



動物福祉の現在

出版社：農林統計出版

上野 吉一：編著，武田 庄平：編著

A5判 200ページ 並製 定価：2,500円＋税

ISBN 978-4-89732-318-3 C0045

初版発行年月：2015年04月

本書は動物福祉（アニマルウェルフェア）に関する解説本である。上野、武田両氏の編集で、両名も含め13名の国内第一線で活躍の研究者が執筆している。アニマルウェルフェアの国内での必要性が急速に増しているものの、現在、国内執筆者による解説は、佐藤氏の『アニマルウェルフェア』（2005、東京大学出版会）や、伊勢田氏の『動物からの倫理学入門』（2008、名古屋大学出版会）のみである。そうした中で、本書の存在は極めて貴重である。

本書の「はじめに」に上野氏が述べているように、「人間の動物への意識は、時代や文化によって変化し、多様な人と動物の関係性（単なる食物資源だけではない関係性）が、各時代・各地域（世界基準であれば地球単位の地域）でそれぞれに形成される。つまり、私たちが理解すべきことは、「今、この場所」での、私たちの動物に対する意識である。これまでの科学的知見に照らし合わせ、動物に対し「何がよくて」「何をしてはいけないのか」を、常に現代的に判断する姿勢である。

私たちは、「福祉」を「手を差し伸べること」と理解しがちである。正しくは、「心身とも幸福な状態」のこともあり、対象となる動物の主体性が重要となる。この本書に記載された指摘は、家畜福祉を考える際に、真にまとを得た表現で

ある。本書を読んで、家畜管理学や家畜行動学を学ぶことは、この「心身ともに幸福な状態」を目標として、家畜から発せられるサインを読み状態を知り、不足するものを判断し、飼養管理の中で対応する手段を選択することであると教えられる。つまりアニマルウェルフェアは、これまで志向され研究されてきた「家畜管理」そのものであると確認できる。

本書の内容は、まず現代のアニマルウェルフェアの考え方を理解するため、動物観・動物倫理観の歴史的变化を概説（日本については第2章に詳述）し、あわせて「動物愛護」、「動物の権利」および「動物福祉」の区分が説明されている（第1章）。動物福祉が本書のテーマであり、その説明では、「5つの自由・解放」（第4章）を取り上げ、さらに詳しく説明される。

そうした説明の後、本書では身体（第5章）および心理的にとらえる動物の「幸せ」（第6章）を解説している。また、動物を、実験動物（第7章）、伴侶動物（第8章）、家畜（第9章）、動物園動物（第10章）および野生動物（第11章）に分け、現場レベルで解説しているのは、きわめて理解しやすい示し方である。さらに、消費者（当世の動物観を作り出す人々）との関連で「食品認証」もアニマルウェルフェア上、きわめて重要であり、第12章が割り当てられ、詳細に記述がなされている。

このように本書は、全体を通じ、動物と人間の関係に関する本である。「動物を管理する」人にとっては必携の、アニマルウェルフェアが各分野で広く取りあげられていることを考えれば、動物にわずかにでもかかわる人にとっては、入門書としても活用できる良書である。

（酪農学園大学 家畜管理・行動学 森田 茂）